

の力も借りながら、それぞれ糞乾施設や堆肥舎の建設に努めました。さらに、増頭した分の堆肥の行方についても検討を始めました。」



東山 基さん

そして、余剰堆肥の処理と自給飼料確保の両面から、粗飼料基地での堆肥を利用した飼料作物の生産に問題解決を求めたのである。

粗飼料基地側からは、それぞれ質の違う個々の農家からではなく、一元化された均質な堆肥であればという条件が出された。

「それじゃあ、みんなでお金を出し合って、共同で堆肥舎を作ろう、共同で飼料作物を作ろうと。私たちは、化学肥料に頼らない牧草、有機堆肥による牧草で育った牛から摂れる安心安全な牛乳を届け

たいという思いをずっともっていましたからね。」

### 資源循環型農業への挑戦

干拓畜産生産組合では、環境整備委員会を設け、何度も何度も堆肥舎建設に向けて会合を重ねた。平成十五年十月に、一一戸の畜産農家で堆肥舎部会を組織し、共同堆肥舎は平成十五・十六年度の二カ年事業で建設された。

総工費八一〇〇万円をかけた床面積一〇一〇㎡の上に立つ鉄骨造りの巨大な箱に、みなが夢を託したのである。この堆肥舎で、各農家から運ばれた堆肥が調合され、利用開始から二カ月の間で、一七〇〇tもの堆肥が処理された。

ときを同じくして、飼料作物の大規模栽培の動きも始まる。畜産農家の中から受託組織である農事組合法人「干拓コントラ」が設立され、粗飼料基地の未利用地約九〇haを借り受けて、自分たちの土地と合わせて一四〇haの土地の土づくりを行い、飼料作物であるトウモロコシの栽培を始めた。共同堆肥舎で調合され

た堆肥の大部分がここへ運び込まれた。

こうして、堆肥処理から自給飼料生産へとつながる資源循環型農業への取り組みがスタートした。

### 共通課題から意識変革へ

「堆肥舎の建設もトウモロコシの栽培も、今まで自分の経営のことでいいっぱいいっぱいであつたものが、共同でものを考えるという面で、大変厳しいものがありました。」干拓コントラの代表者である高田浩さんは語る。



高田 浩さん

「しかし、堆肥やトウモロコシをとおして、おらが大将から、共同体への意識変革、畜産農家同士の横の連携、さらには次世代を担う後継者も目の色が変わってきた

という面で、大変意味のある取り組みだと思っています。今後は、市民に我々の取り組みが理解されるように、目に見える何かを残していきたいと考えています。」

### もう一度原点にかえって

最後に、山本恵之組合長はこう語ってくれました。「堆肥の問題はこれで終わりじゃない。もう一度原点にかえって、環境問題に配慮した営農を追い求めていきたい。そして、市民の人には、ぜひ干拓の農場を見に来てほしい。乳搾りの現場を、エサやりの現場を、ふん尿処理の現場を。そんな中から我々の取り組みが理解してもらえと思う。」干拓畜産農家の挑戦は続いている。夢の大地での取り組みを市民みんなに理解してもらいたい。安全・安心なものをお届けするためのその挑戦を見つめて欲しいと。:

広大な農地の中で、恵まれた太陽の光と干拓の風の中で育ったロール状の牧草が、気持ちよさそうに夕日を浴びている。

## 第35回全国酪農 青年女性酪農発表大会 農林水産局長賞

東山 大介さん

(カブト中央町)



東山さんは、意見体験発表の部で「堆肥舎部会の現状と課題」について発表しました。耕畜連携・助け合いの精神をもとにした資源循環型農業への取り組みが、会場から関心を集めました。

「こういった大会に出たことが刺激になりました。これからも耕畜連携で干拓の農業の活性化に取り組んでいきたい。それから市民の皆さんにも僕たちが努力しているところを見てほしいです。そのために、堆肥舎部会だけでなく、若手農業者で組織する『潮会』の活動を通じてPRして、もっと理解を得られるようになればと思っています。」